阿波の人形浄瑠璃鑑賞と　すだち採り放題徳島ｸﾞﾙﾒﾊﾞｽﾂｱｰ

2004年９月２５日（土）・２６日（日）

原さん徳島を目指す

２５日朝、天候は晴れ、晴天の大阪駅の桜橋口改札前に集合。熟塾の黄色い旗を掲げ、点呼を行う。「原季美子さんがまだ？」８時２０分集合時間になっても、原さんの姿がない。８時３０分、原さん以外は集合。「道中何かあったのかしら？」とにかく、集合場所の大阪駅の改札口前に参加者を立たしておくわけにはいかない。とりあえずは、ヒルトンホテル前に停車しているバスへの移動を促し、北原さんと木下さんと原田が残った。８時３５分、木下さんが他の改札口かもと、見に走る。４０分携帯電話が鳴る。原さんからだった。「今起きたところ・・・」とのこと、まさかの電話だったが、木下さんを呼び戻し、北原さんとバスに乗る。「原さんは今起きたところとのこと。でも、後を追って徳島にいきますからの伝言ありました」と報告。バスを走らす。大阪駅のガード下を潜り、一路高速道路を東へ。行程の案内と、自己紹介にマイクを回す。途中停滞もなく、右手に六甲の山並みが見え出すと左手に瀬戸内の海が輝いている。何度か原さん宅に電話を入れるが、すでに飛び出した様子で留守電の案内ばかりが応答し続ける。

やがて、明石海峡大橋を渡り、ドライブインでその雄姿を眺めながら、休憩。そこに、鳴門グランドホテルから電話。「原さんという方が、食事までに鳴門につきたいとのことで、こちらまでの道順は伝えておきました」とのこと。一刻も早く昼食の食卓で鳴門の鯛と遭遇したい原さんは知恵を振り絞り、鳴門グランドホテルに電話を入れて、経路を聞き出した。確かに、鳴門の道に不案内なメンバーに電話を入れても戸惑うばかり。大阪からのお客様も受け入れているホテルに電話でその経路を聞きだすとは･･･原さんのとっさの機転に驚いた。

鯛ホテル・鳴門グランドホテル

バスは、又一路、淡路島を駆け渡る。晴天に恵まれ、左右に海の輝きを眺めていた。やがて、鳴門大橋に近づく、午前１１時半、駐車場からしばし坂道を歩き、鳴門大橋架橋の車が行きかう下に、左右に網をはって、通路を形成し人が歩く遊歩道として開放している「渦の道」にたどり着く。散策路には所々に海面を覗き込めるように樹脂のガラスが張ってあり、４０メートル下の海面を覗き込むことができる。当日の大潮は午後４時頃、潮目は穏やかで、鯛の一本釣りの小船や、大型のコンテナ船など大小の舟が海峡を越えていく。その海峡の上を走り抜ける潮風が、渦の道を散策する人々を穏やかに包み込む。思い思いにゆっくりと 40 分程の海上散策を楽しんだ。ゲート前で記念写真。

バスに戻って５分ほどで、鳴門海峡大橋を見上げる浜辺に面して鳴門グランドホテルが聳えている。前回、深堀さんと木下さんと下見をしたときに、旅にｸﾞﾙﾒを求める熟塾としては、是非鳴門の鯛めしをと、探索。ガイドブックや地元の人の口コミで人気店「鯛丸」が浮上、暖簾を潜ったがファミリー向けだったので、姉妹店の割烹にたどり着いた。生け簀もあり、雰囲気は合格。鯛めしと注文すると、鯛一匹を土鍋で炊き上げるので 3 日前の予約をといわれ、土鍋一つで 8000 円也。急には準備できないが、鯛釜飯なら一人用の固形燃料で炊き上げることができるとこので、先ずは注文。刺身も美味で、味は太鼓判。で、会場はと、二階の部屋を案内されたが、締め切られていた部屋の窓から海は見えない。首をかしげながら、廊下にでると、チラシに「鳴門グランドホテル」の宣伝が・・・ということは、ここはグランドホテルの直営店ですかとたずねると、「鯛丸が鯛料理で人気が得て、この料亭を建て、グランドホテルを建てた」とのこと。正に海の神様、戎さんが抱えるお気に入りの美味しい鯛料理で建てた鯛ホテルに直行。建物も海の前で雰囲気も従業員の態度もよく、一階の食事処に飛び込んで鯛のメニューをとたずねると、通常はないけれども予約いただいていればで、部屋を確認するとお座敷が空いているとのこと。本番では土鍋に鎮座する鯛を賞味したいものだと、鯛めしコース 5000 円でお願いした。そして、今回の第一のグルメ。お楽しみの鯛尽くしに席にたどり着いた。

原さんの鯛への一念通ずる

渦の道を散策したメンバーがバスを降り、ホテルの二階へ。床の間にはおおきな布袋さんが、満面の笑み。二列

に並べられた大きな座敷机に手洗いをすませたメンバーが席を決め始めたちょうどその時、海をバックに、「こんにちは」の声。見ると、難波駅からの徳島行きの直通バスに飛び乗った原さんが、皆の様子を見ていたかのようなタイミングで、座敷の入り口に立っていた。「あぁ。原さん！」の声があがる。「すんまへんなぁ。遅れまして」集合時間には遅れたが、昼食時間には絶妙なタイミングで間にあった。

無事参加者全員が食卓を囲んだところで、ビールもそれぞれのコップに注ぎいれられて今回の参加者の長老、首に一眼レフのカメラをかけた熟塾専属カメラマンの杉山さんに乾杯の音頭をとってもらった。食卓には、見事に盛り付けられた鯛の活き造り、仲居さんが透明の刺身を皿に盛り分け一人一人の前に運ばれる。まずは舌包み、「鯛のお刺身がこんなに甘かった！」に感動。

で、次に宝楽焼、鯛が開かれ宝楽鍋に鎮座、ほど良い焼き加減で、身がふっくらと盛り上がりなんとも上品な香りを放っている。そこで、原さんが袋から取り出した資料を配布。**「浮瀬」**という大阪「食」文化専門誌（800円）NO.５「魚島（櫻鯛）」特集号に、東成栄推協深江会員で 1994 年 7 月に発行した手作りの冊子「ヤヤことば　オトトばなれの今、鯛からのよびかけ！でめでたい席に出された日本人好みの淡白なうまみ」にここでは栄養価も紹介されている。

《鯛の効薬法と食品》

鯛を百薬の長と激賞する。すなわち、煮て食べても、焼いて食べてもとみによく人体を益し、五臓を補い、腹中を温め、気血を滋（ま）す。常食すると、顔色をよくし、人の寿を延ばし、肝臓を潤し、腸胃を調え、久洩虚痢を治し、水気腫満によい。あるいは、鱠（なます）につくり、生姜、山葵と一緒に食べると、胸隔を利し、胃を開き、食を進め、虚瀉を止める。そのほかに下痢、手足のなえ、痘疹に効き、塩鯛の乾したものの頭を焼いてすりつぶし、胡麻油とともに練ると、魚の目の特効薬になる。

この魚は“陰中の陽”であり、身体の陰にはいって気を益した血を補う。多食すると、火を動かし熱を生ずる。たとえば、内障・虚眼という病には鯛の腸の塩辛を常食して治す。また、体が弱くて食が少なく、乳汁の出も悪く、乳房の衰垂した乳婦が、味噌、酒粕と一緒に煮た鯛の肉を食べると、３．４日にして乳房は張り、乳汁も湧き出すようになった。葱の白身と一緒に鯛の肉を煮たり、山葵、生姜、酢を薬味にして刺身を食べたりすると、10日ほどで復活したという。以上より、鯛は肝臓脾胃の温補の剤である。

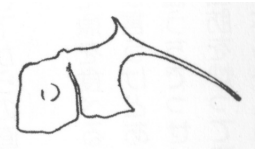
追記で、原さん直筆の**「熟塾の 10 年、この先もよろしく　めで鯛と一緒によろしく。四方の海波平らかに！　熟塾誕生からちょうど 10 年、なにわ大賞受賞の原田彰子代表様と平成16年7月28日の式典。意気揚々のおことば（これからの 10 年・・・）に謹言。良い種をまいて、花が咲いた 10 年、この先の 10 年は。熟する実に向進する熟塾でありましょうとこの度諸賢同志の塾生は思っておりましょう。**

瀬戸の内海渡る船　宝船　同乗の七福　みな笑みふくむ。

紀州路の釣人と舟を憶い出しておりま　原季美子」の書き物もいただきました。

金比羅詣の真鯛の口福

で、ちょうど各自の前に宝楽焼の鯛が運ばれてきたので、鯛の頭の部分に当たった人は、胸鰭の付け根にある肩帯を構成する肩甲骨と烏口骨を上手にとりだすと鯛の形が現れると聞きき、捜索開始。テーゲットは**「鯛中鯛」（たいのたい）**と呼ばれ、江戸時代には粋筋のお姉さんたちが財布の中や帯の間に忍ばせてお守りにする風習があったとかで、ワイワイと鰭の辺りを探り出す。杉山さんが先ず発見、次々と発見の報告。



更に食べ続けると骨にこぶが見られ、古くからこのこぶを**「鳴門骨」**といわれ、流れの早い岩礁性の海底を住処としている真鯛は、骨折した部分の回復が旺盛になりすぎてこぶになるらしい。こぶを持つ真鯛は鳴門海峡から入り込み金比羅神社（香川県）に参詣したものだという言い伝えがある。このような真鯛は、**「荒波越した鳴門のこぶだい」**と称され、鳴門の激しい潮流にもまれたつわものの証。養殖の鯛とは異なり、厳しい環境の中を生き抜いた鯛の向こう傷。人間もなまぬるい潮の中で飼いならされ楽に生きている者と、厳しい荒波に向かって生き抜いてきた者とでは、人間味に差ができるみたいなものかと思い当たる。人工飼育の鯛は、どうも生臭い。身にしまりがなく、焼いても魚臭い。しかしこの威風堂々たる鳴門の真鯛は、激しい潮流の香りをわが身にしまいこんだように生臭さがない。刺身は、「甘露」にさえ感じるほどの優しい甘さを有し、焼いては芳しく、そして、お待ちかねの鯛めし登場。土鍋の蓋があけられると、蒸気と共に至福の笑顔が湧き上がる。大きな土鍋の中に、海を泳ぎまわっていたままの勇姿を横たえる真鯛。仲居さんの手で、骨を手際よく取り出して、身を満遍なく混ぜて、それぞれの茶碗に高々と盛られる。そこ

に、潮汁、蓋をあけると鳴門のわかめに鯛の身、みな上品な薄味に仕上げられている。今回は、滋味を楽しんだ。地元の新鮮な素材そのもののからじっくり湧き上がる旨味をゆったりと味わう。本当に美味しいものに味付けは不要。食べきれない鯛めしは、ラップに包んで夜食になり、日本酒をちびりちびりと口に含ませながら鯛めしを味わうと、これがまた酒の肴としても絶品。流石、金比羅詣の真鯛は口福を招く、五臓六腑にご利益がありそうだ。

鳴門グランドホテル　℡０８８６－８７－１１５６

阿波の農村舞台・さくら野舞台との出会い

鯛めしに魅了され、ゆっくりしていたら２時。３時に神山町まで辿り着くには直行するしかない。四国八十八箇所の第一番札所霊山寺参拝予定だったが、ここは通り道、門からずっと奥が見えるところにバスを止めて、車中からの参拝になってしまった。二番札所、三番札所と続くが、これまた車中参拝。

一路、神山町向かってバスは１時間ひた走る。途中急カーブが続き、杉木立の渓流沿いに峠を越えると、広々とした川に続き、また山の中へ、バスは宿泊予定のホテルを更に走り、川沿いの道を降りてカーブを曲がった道沿いで、小野さくら野舞台実行委員長の小川会長が出迎えてくださった。他に車が５台ほどがエンジンを休めていた。

バスを降りて、細い坂道をあがると、ひんやりとする空気を放つ杉木立の大木が居並ぶ中に、荒削りの木材を組み立てた鳥居が目に入る。足もとを気にしながら、200メートルほど歩くと、広場にでて、左手に大きく戸口を開いた家屋が目に入った。そこに、襖絵がならび、その前に机を並べ資料が積まれていた。小川さんの他に７名の実行委員の皆さんお昼から２時間がかりで襖絵の準備をしてくださっていた。農村舞台のフスマ絵を見せてくださいと気軽にお願いした為だった。その他には村人や外人女性の姿もあった。家のフスマの半分ほどの幅の板８枚を並べ、その上に背景になる絵が描かれ、それを自在に操ってフスマカラクリと称して、阿波の国では、村ごとにその技巧を競ったそうだ。

更に、今回、ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞで「阿波の農村舞台の会」に出会い、その掲示板に大阪から農村舞台見学に行きますと書き込んでたところ、事務局の徳島県庁勤務の佐藤憲治氏よりメールをいただき、更に事務局長で建築家の林茂樹様より「阿波の農村舞台」という写真集出版しているのでとメールをいただく。

http://www.nousonbutai.com/index.html

●「阿波の農村舞台」

「阿波の農村舞台」の頒布について

昭和 59 年に発足した阿波のまちなみ研究会が、国土地理院の地図に記された神社のマークを頼りに県内の農村舞台をくまなく調査し、まとめたのが「阿波の農村舞台」。「阿波農村舞台の会」の設立の契機となった本であり、まさに徳島の農村舞台の原点といえるものです

A4 版 (21cm×29.7cm) 160 ページ
調査･編集　阿波のまちなみ研究会　写真　　西田茂雄
発行日　平成 4 年 10 月 20 日
発行所　阿波のまちなみ研究会
価格　　特別価格 4,000 円 (消費税、送料込み)
　　定価 5,000 円をインターネット特別価格で頒布。

●申込先

〒770-0931 徳島市富田浜 2-10 徳島県建設センター5 階
(社)徳島県建築士会内
阿波のまちなみ研究会　代表幹事　喜多順三
Tel.088-653-7570, Fax.088-624-1710
電子メール　jkita@mb.infoweb.ne.jp
お申し込み後、振込用紙をお送りします。入金確認後、発送。

今回は佐藤さんがその写真集を持ってさくら野舞台に駆けつけてくださった。他に神山町では「神山アーティスト・イン・デジセンス」と称して、６年前からアメリカやアフリカ・韓国などのアジアや国内から若手の芸術家を“ 自然に恵まれた人情味あふれる日本の田舎・神山 ”に身を委ね子供たちや村人と交流しながら芸術作品創

造の時空を与えようという制度。今年は、イギリスから来たばかりの「切り絵師」の女性もわれわれ同様に、興味深そうさくら野舞台実行委員会のメンバーが襖絵を順次裏がえししながら舞台背景を変えていくのに見入っていた。

阿波の農村舞台の本によると「ふすまカラクリとは、人形浄瑠璃では舞台背景に多くの襖絵を使用する。舞台背景に取り付けられた数本の敷鴨居に何重もの襖を差し込み、演技の進行にあわせて、ふすまを両方に引き分けたり、片方に引き抜くなどして前面から順次みせていく。御殿物の場合には、段々と奥深い空間を創り出し、遠近法で描かれた「千畳敷」とよばれている「ふすまカラクリ」であるが、巧妙な変化による仕掛けが面白く、それだけを見世物として見せるようになっていった。人形芝居の盛んさった徳島では、特にふすまカラクリには趣向を凝らした。変化の方法も引き分け、行き違い、チドリの他、回転（田楽返し）・上昇などが加わり巧妙なカラクリ仕掛けとなっている。」とある。

フスマを下から眺めた後は舞台裏に回ると、裏に小さな社があり、これが天王神社の社で、舞台の裏に控えめに鎮座なさっていた。そして、舞台向かって右手に、舞台に連なる小さな舞台。これが大夫座といって大夫と三味線方が演じる舞台で、農村舞台は他にあってもほとんどが歌舞伎などで、「太夫座」という人形浄瑠璃用の舞台を併設しているのが阿波の国の農村舞台の特徴とのこと。先ず秋山さんが「太夫座」に座ると、次々に大夫気分で座ってみる。客席を見下ろしてなかなかの眺め、やや斜めになっているので、舞台の動きも観客の動きも視界に入る。

ここで気がつく、マイクのない時代、屋外で義太夫を語るにはかなりの大声が必要であっただろう。また人形も大きな振りでないと動きが見て取れないだろう。小技は効かないなぁという印象を持った。

一通りの見学が終わると、そしてその場にいた人たちの自己紹介後、舞台前で記念写真を撮った。また坂道をくだり、小川さんからの差し入れの冷たい「すだちジュース」の爽やかな喉越しを楽しんだ。

卑弥呼伝説もある天女が授けた神山温泉

先ほど来た山道を戻ること約 10 分、その日の宿「四季の里」の駐車場にバスが滑り込んだ。5 時過ぎ、部屋割り後、神山温泉の湯船に両手両足を伸ばす。

《神山温泉縁起》：この地には、昔、天女が授けたと言われる霊水が湧出しており、塩辛く無色無臭で、数少ない貴重な塩泉として人々に利用されていました。入浴すれば肌触りが良く滑らかで、その入り心地の良さと入浴後の爽快さは他の温泉では得難い名湯となりました。郷人達は、霊水を授けた天女を「塩水大明神」として奉りました。慶応４年（1866 年）、小規模ながら地域の人たちの共同経営で湯屋として開業すると、近辺の次郎銅山の労働者を中心に、水質の良さを聞きつけた遠くからの湯客も多数訪れ賑わいを見せましたが、銅山の衰退に伴い明治８年に廃業となってしまいました。しかし、その後、土地の寺院・善覚寺住職が、神山の名湯を無くしてしまうことを遺憾に思い、鉱泉分析試験を依頼しました。分析の結果「温泉として価値高く医治効用も顕著」との確認を得て、大正１４年５月、私財を投じて「弁天鉱泉湯」として開業しました。

湯屋は繁盛し経営も順調でしたが、戦争に入りやむなく休止の状態となってしまいましたが、昭和４５年、神山町鬼籠野出身・山本最純氏が温泉試掘を行い、湧出量も増え、その源泉は郷土住民福祉増進の為にと神山町に寄贈されました。

温泉寄贈により、昭和４７年５月、町営の神山温泉保養センターは開業し、平成５年にはホテル四季の里も併設オープンし、現在に至っております。ナトリウム塩化泉と、炭酸水素泉の効果を併せ持つ珍しい泉質です。pH 8.2 の弱アルカリ性の性質を持ち、お肌に良く美人の湯とも称されています。

また、無味無臭でガス発生なしと、泉質としても優秀です。神経痛、筋肉、関節痛、冷え性、火傷、慢性皮膚病等に効果が期待できます。陽イオンと陰イオンの割合が、2：1 と理想的で、マイナスイオンによるリラックス効果なども期待できます。カルシウムイオンとマグネシウムイオンがバランス良く含まれているので体内のバランスを調整する効果も注目されています。

神山温泉は村の人も入浴し、打たせ湯、サウナなどもあり広々としており夜 9 時まで営業。ホテル棟には 24 時間入浴できる宿泊者専用の湯船もあります。

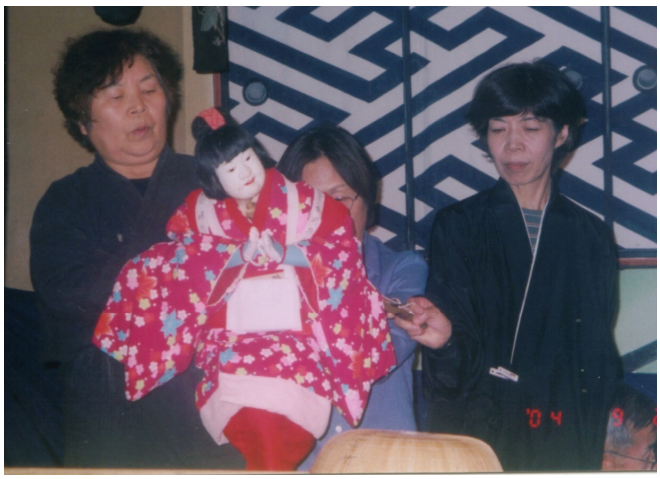
ホテル四季の里　０８８６－７６－１１１７

神山町に嫁いだ友人の縁で“寄井座”と出会う

ゆっくりと美人の湯に浸かり、疲れを癒したところで、6時半より洋室で、夕食はステーキディナー。サーモンのオードブルに、帆手や白身の魚などの旨味を引き出したスープに、柔らかなステーキにサラダとライス、ほどよく甘く熟したメロンにコーヒー。ビールで乾杯のあと、ワインにと、和気藹々とした夕食は戎顔。

食後に、ホテルの前の吊橋をわたり、ふれあい公園にある灯りのともった小屋にぞろぞろと移動。小屋は３０名ほど入ると満席で、目の前にすでに人形が控えていた。何故、今回徳島なのか、何故、神山町にたどり着き、人形浄瑠璃なのかというと、実は会社の先輩が神山町に嫁いたのがご縁。嫁いだ翌年から毎年すだちを送ってもらい「一度遊びにきて、私人形浄瑠璃をやってるの」とのことで、では大阪の文楽との比較文化論的に現地視察を思い立った。勿論グルメも道連れにしての企画だ。

彼女が所属しているのが「寄井座」と、実は淡路の人形遣い植村文楽の一派、植村都太夫が開いた一座、縁あって嫁いだ神山町に押しかけ友人を訪ねてのツアー。村の人々は、友達の友達はみな友達だと、温かくお迎えいただいた。これも、かって日本人が持っていた村社会の一面、忘れかけていた人と人の絆が、農村舞台や人形浄瑠璃、天狗久の頭へと結びついていった。



先輩に付いて左手を遣う岩丸さん

阿波の人形浄瑠璃一座“寄井座”

嘉永元年（1848）年に神領村の有志の努力によって作られ、「上村都太夫座」と呼ばれていましたが、いまは「寄井座」と呼ばれています。娯楽の少なかった大正・昭和の初め頃には男性中心に地元の有志が座員として成長以後、各地で公演などをして非常に喜ばれたようですが、戦後の高度経済成長以後ラジオやテレビなどと娯楽機器の普及や若者の町外への通勤や転出、趣味の多様化などにより次第に座員が少なくなり、加えて高齢化によって活動を休止していましたが、昭和５０年から女性を加えて活動を再開して現在に至っています。

人形遣いの技術は、明治２５年頃に淡路から神領村に住み着いた淡路人形座の市川浜蔵氏の指導によるものを伝承しています。

所有する人形の数は、６０個余りありその殆どが初代「天狗久」作で、このうち１３個は昭和２７年に徳島県の有形文化財に指定されています。座元の河口榮祐氏の蔵で保管されている頭や衣装を外題によってその都度取り出して、練習や出演に備えています。

座員は現在２２名でうち女性が１２名ですが、６０～７０歳代の座員も多く、若手座員の育成が課題です。

主な活動としては、徳島県下の人形座が出演する「人形浄瑠璃夏期大会」と定期的なものから、県内各地や神山町内での各種行事にも多数参加しており、多くの皆さんが喜んでくれるのが何よりも嬉しくて、座員の励みとも生きがいともして頑張っています。

平成１４年度には「神山阿波木偶まつり」を開催し、頭や衣装、道具類などを展示して、町内外の多くの方々に鑑賞して頂き好評でした。また平成１５年には「ときめきダンスカンパニー四国」との共演で人形浄瑠璃と創作ダンスのコラボレーション「いにしえの風～おつる慕情」を文化の森２１世紀館野外ステージと郷土文化会館の２箇所で公演し大好評でした。

平成１１年には、徳島県下の人形座などが加盟する阿波人形浄瑠璃振興会が、国の無形民族文化財に指定され、人形浄瑠璃の文化的価値が高まり、関心の次第に高くなっています。

また、神山町内の各地から「ふすま絵」が約１５００枚見つかり、町の文化財保護審議会やふすま絵保存会によって整備が図られており、特に傷みの著しいものは順次町によって修理が図られています。このふすま絵は人形浄瑠璃の背景として作成されたもので、小野さくら野舞台の復活公演では、天王神社で保管しているふすま絵を背景として使用していますが、このふすま絵と人形浄瑠璃をセットにして、伝統芸能を神山町の宝として伝承していけたらと頑張っています。

そして演目は、有名な傾城阿波の鳴門。隣に腰掛けた作庭家の古川さんが思わず泣くものだから、私ももらい泣き。涙だって連鎖するの？状態。でもやはり「他の子が母さまに髪結うてもらうを、見るにつけて、悲しい、悲しい・・・」の下りで最高潮に達し、涙ポロポロ。文楽は大夫、三味線、人形が一体となってのバランスだが、巡礼の段は女性の大夫が子が親を親が子を思う情を

切々と語り涙を誘ったが、十郎兵衛の段では男性の大夫のお鶴とお弓の語り口が荒削りで、人形の遣い手は変わらないのにどうもバランスが悪い。胸に迫った思いが一気に沖合いに去ったという感じで、隣の古川さんの涙腺も乾いてしまった様子。物語の流れに押し流されて幕切れとなった。
文楽の舞台で、若い人形遣いを見慣れた目には、60 代 70 代の熱演が新鮮に映った。野外の農村舞台で演じされたので、媚びらないおおらかな人形の動きや人形そのものの大きさも文楽とは異なっていた。

傾城阿波の鳴門

解説及びあらすじ

この作品は近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」を、近松半二、竹田文吉らが改作したもので、夕霧伊左門の話に阿波の国主玉木家のお家騒動、阿波の海賊十郎兵衛の巷説を取り混ぜ、１０段続きに仕立ててあります。明和５年（1768）年に大阪竹本座で初演されました。現在では八段目の「十郎兵衛住家の段」いわゆる「巡礼歌の段」と「十郎兵衛内の段」を上演しています。徳島で人形浄瑠璃といえば、誰もが思い浮かべる定番中の定番です。

★ 阿波徳島の藩主玉木家のお家騒動で、忠義の家老桜井主膳が、悪人の小野田郡兵衛のために、主家の重宝「国次」の名刀が盗まれましたが、玉木家を勘当され帰参を願う十郎兵衛は、紛失した「国次」の名刀の詮議を命じられます。主君のためには盗賊となっても詮議をしてみせると約束した十郎兵衛は名前を変えて盗賊の仲間に入り女房のお弓と共に大阪の玉造に住家を求め、日夜刀を追って辛苦しています。

～巡礼の段～

お弓が一人で留守番をしているところへ、仲間から十郎兵衛ら盗賊の悪事が露見し、捕らえられた者もあるので早く立ち退けとの知らせが届きます。いまだに国次の刀の手掛りはなく、夫の無念を思いやると国次の名刀が見つかるまでは・・・と神仏にお弓が手を合わせているところへ、かわいい巡礼の詠歌が流れてくるところから始まります。あまり可憐な少女なので、身の上話などを聞いてみると、この子こそは国許に残したわが娘お鶴です。預けておいた祖父母が死んだので、両親の行方を尋ね出そうとして巡礼の旅に出たのでした。お弓はわが子愛しさ、可愛さにその場で母と名乗って抱きしめたい思いからられますが、共に暮らすことができない境遇ですから、名のらない方が娘のためと思い直し、何かといたわりの言葉をかけた後、涙と共に心を鬼にして分かれます。お鶴の歌う巡礼歌が次第に遠のいていくと、お弓はこらえきれずにその場に泣き崩れるのでした。しかし、今分かれてはもう会われぬと思い直したお弓は、娘の後を追って駆け出すところで終わります。

十郎兵衛内の段

入れ違いに十郎兵衛が巡礼の娘の手を引いて帰ってきます。わが娘とは知るはずもなく、娘が小判を持っていると聞き、その金を借りようとします。しかし、おびえたお鶴が大声を上げて逃げようとしたのを止めようとして、あわてて口をふさいだところ誤って窒息させてしまいます。

お鶴を見失い力なく戻ったお弓はこの有様を見て、最前お鶴がどんなに両親に会いたがっていたかをさまざま思い出し、母親に会いながら親子の名乗りもされず、あまつさえ実の父親に殺されてしまった不幸な娘の身の上を思いやって涙にくれます。十郎兵衛もわが子でわが娘を殺してしまった事を知ると、後悔の涙にむせぶのでした。嘆きのうちに捕り手の迫る気配に十郎兵衛は必死の覚悟、捕り手を追い払うとお鶴の死骸もろともわが家に火を放ち、夫婦は何処ともなく落ちのびてゆくのでした。

深みのある表情をもつ初代天狗久の頭

終了後、舞台傍に寄ってきた私たちに、一座の人形遣いは惜しげもなく、「人形を持ってみますか」と投げ渡す。十郎兵の頭はかなり大きい、これも重要文化財の初代天狗久の作品、きりっとした目とちょっとへの字にまげた口元が印象的だった。私が特に惹かれたのは、巡礼のお弓の頭、これも初代天狗久の作品で、子供なのに子供ぱくはなく、可愛くもないし、無邪気でもない、笑っているような寂しそうな・・・で、見る角度で七変化する頭と、目が合うと吸い込まれる。ある意味凄みのある頭だ。母親役のお鶴は天狗久での作品ではない、見比べるとお鶴は人形のようにただ綺麗なのだ。どこからみても、美人なのだが、天狗久の十郎兵衛やお弓の頭（県の重要文化財）のような深みのある表情持ち合わせてはいない。大事に取り扱われているからか、汚れを寄せ付けないのか、塗りなおされることなく天狗久の手から生まれたままの綺麗な肌をキープしている二体の素顔に驚いた。

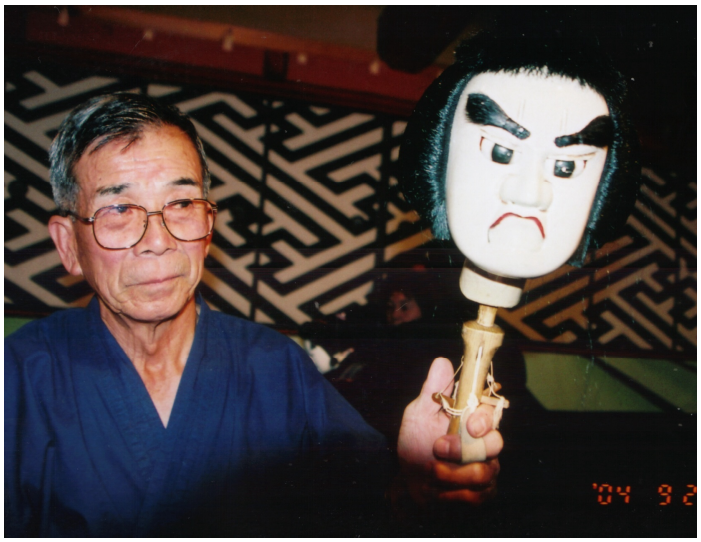
そして、この寄井座には 10 月 24 日に大舞台が待っていた。徳島県での秋の植樹祭に皇太子様がお見えになる時に、参加者に傾城阿波の鳴門を披露し、お手植えさ

れるときにこの十郎兵衛が介添えし、他の人形遣いもお見送りするとのこと。その植樹祭のリハーサルに追われる寄井座の猛特訓の最中だった。

それにしても、皇太子様に拝謁する十郎兵衛やお鶴やお弓の人形にまじかに見て、触れさせていただけるなんて光栄だった。人形を手渡された時の、どしっとした重みは人形の重みだけではなく、歴代の村人の思いも手にしたかのようにずしりと重たく感じられた。ある意味、村人と苦楽を共にした人形だけが持つ素朴だが不思議な迫力。舞台で演じられる度に、人形たちは歴代の村人の思いと共に蘇生する。

初代　天狗　久

本名、吉岡久吉、安政五年五月二十一日徳島市国府町中村の笠井家に生まれる、十六歳で和田の人形富に弟子入りをし、十年後、吉岡家の養子となり天狗久で独立した。[日下開山] [久義]の銘を入れた有名な作品がある、現存している作品は明治二十年前後のものが多く残されている。明治二十五・六年ごろから頭の目にガラスを使うことを考案した、それまでは木で作った目であった、阿波人形の頭が写実的になったのは天狗久の作品からである。文化映画　[阿波のデコ] [淡路の人形芝居]に出演、宇野千代の[人形師天狗屋久吉]、久米惣七の[天狗屋久吉芸談]などの書物に登場している。昭和十八年十二月二十日、八十六歳で死亡。四十数点の作品が徳島県文化財に指定されている。



人形浄瑠璃とは

人形浄瑠璃は、浄瑠璃、三味線に合わせて曲中の人物に扮装した人形を操る。わが国固有の伝統人形劇です。人形を動かして庶民の慰みとしたのは、平安時代の傀儡子による大道芸「あやつり人形」にはじまるといわれています。室町時代には街頭あるいは各戸毎に訪問して、胸にかけた箱入りの人形を遣っていました。また、語りものの浄瑠璃は、平曲を語った琵琶法師が享禄（1528～32 年）のころその余技に牛若丸と浄瑠璃姫との恋物語を書いた浄瑠璃１２段草子を扇拍子で語ったときに始まるといわれています。まもなく永禄（1558～70 年）のころ、琉球から渡来した三味線が伴奏として取り入れられ、慶長期（1596～1615 年）にいたって西宮の傀儡子と結びついて小屋を作り、人形遣い・語り手・三味線弾きが一体となった人形芝居を興行するようになり、現在の人形浄瑠璃の形となっていきました。人形浄瑠璃の原形ともいえる、この人形芝居が大きな転換期を迎えたのは、近松門左衛門・竹本義太夫両巨匠の登場する 17 世紀後半になってからです。

近松門左衛門と竹本義太夫のコンビが確立されるのは元禄年間で、同 16（1703）年には「曽根崎心中」が初演され、大ヒットとなります。近松門左衛門は「文句は情をもととす」を、竹本義太夫は「深く情を語りなす」をモットーにして、人間のドラマを描いたことによって、人形浄瑠璃は時代を超え境涯を越えて、見る人の心を打つ芸能となりました。二入の精神は、その後 300 年を通じて受け継がれ、人形浄瑠璃は私たちの貴重な財産となっています。また、近松門左衛門の次の時代には、一人遣いだった人形も 1734 年に大阪竹本座で吉田文三郎が今の三人遣いを考案しました。主遣い、左遣い、足遣いの三人遣いにより人形の動きはよりリアルさを増し、世界で例をみない複雑で巧みな表現が出来るようになりました。

徳島県の人形浄瑠璃

阿波の人形浄瑠璃がいつから始まったのかは明らかではありませんが、藩主蜂須賀家の庇護もあり、加えて人形の頭の製作地でもあったことから、阿波の人形浄瑠璃は大いに繁栄しました。文献上では、阿波の人形浄瑠璃は淡路から伝わったもので、三代目上村源之丞が慶安年間（1648～52 年）に徳島の城下で、操り芝居を仰せ付けられたのが初めてです。その後歴代蜂須賀藩主が、淡路の人形座「上村源之丞座」「市村六之丞座」などに命じてお祝い事のある度に操り人形の興行をさせ、これらの座主には夫役の免除や御手当て金の下付などの手厚い庇護のもとに興行を行っていました。義太夫節浄瑠璃は、いったん流行を見ると大阪ばかりでなく、諸国の人形劇に大きな影響を及ぼし、享保の頃から江戸をはじめ全国に広まり、江戸時代民衆の大きな娯楽となりました。享保時代（1716～36 年）というのは、人形浄瑠璃にとって画期的な時代で、人形の口が開き、五指が動き、目が閉じるように作られたのが享保 12 年、目が動くようになったのが同 19 年というように、目新しい“からく

り”が出現し客の目を引きました。
淡路島の人形座は、享保・元文（江戸時代中期）頃、４０座あったとの記録があり、その後幕末には半減しています。そのころ阿波でも淡路と同じくらいの坐があったと推測されています。明治 20 年頃には 74 座の記録があり、この頃が阿波人形浄瑠璃の最盛期であったようです。初代天狗久（本名吉岡久吉）によると、阿波には玄人の座が多く、徳島の人形座はほとんどが素人座だったようです。玄人座といわれる淡路人形座は、村から村へほとんど年中といっていいほど旅を続け、子供浄瑠璃もあったようでで、小屋掛けやお寺の境内において興行された記録が残っています。

徳島では、農村舞台が発達し、一時は各地に 300 棟からあったといわれ、昭和 63 年の調査では 130 棟が確認されています。勝浦川流域や桑野川流域、那賀川流域など徳島市から比較的遠い所に多く、吉野川流域では見受けられなくて、これらの地域では小屋掛けの舞台を作って有料で演じていたようです。大正の中頃になると時代の流れは当時出現した活動写真、幻灯、のぞきからくりへと客足は伸び、昭和時代に入ってからは、映画や漫画、落語、浪曲などに押されて衰退の一途をたどるようになりました。その後戦争によって多くの座が解散しました。戦後、昭和 21 年に阿波人形浄瑠璃振興会が結成され、徳島県下の大夫、三味線、人形座、人形師などを結集し、伝統ある人形芝居が復活しました。ふるさとの伝統芸能を守り続けようとする多くの人達の情熱に支えられ、平成 12 年には、国の重要無形文化財に指定され今日に至っています。

小屋を出て、農村舞台で再現された襖絵からくりをビデオで見る。15 分の間に、拍子をうちながら、8 枚の襖がころころと変わる。そして、千畳敷きの座敷の奥の景色がはや変わり。テレビも映画もない時代、このカラクリはかなり斬新で、村毎に競ってその技巧を高めた面白みも伝わってくる。まるで大きな動く絵本。龍が出たり、桜が咲いたりで、農村舞台も襖カラクリも徳島ならではの文化で、なんだかとってもすてきな宝物を発見したように嬉しかった。

その後、解散、各自お風呂に入るなり、自由に過ごすして就寝。鯛めしを肴に日本酒やすだちワインを賞味。心地よく眠りに誘われ熟睡！！

<u>すだち狩り初体験</u>

朝、目が覚めて先ずはと窓を開けると霧雨、霧もかかって、どんよりと寝ぼけまなこ。とにかく、朝風呂、しっとりしたローション風呂にツルツルした肌ざわりを楽しむ。

朝食は、山をバックに昨日人形浄瑠璃を鑑賞した小屋と水車小屋が川向に見える一階のレストランで、朝食をとる。アマゴの一塩が美味。雨は上がったものの、霧はまだ晴れない。秋山夏虫画伯は、早朝散歩にスケッチブックは忘れない。サラサラと書き上げた作品はまさにホテルの前の景色。景色一面がスダチ色。

8 時半集合。雨は上がった。ホテルの傍のふれあい公園の真ん中にテントをはり、鋏を用意し、箱や軍手を容易して、神山町役場の観光振興課の粟飯原さんがスタンバイ。休日返上で、わがふるさとのすだち収穫に遠路やってきた私たちを笑顔で迎えてくださった。すだちを採る時の注意点、すだちの棘は、靴裏を貫通するほど鋭いので、枝は他の人が踏まないように幹の足元に投げ入れる。蚊が多いので顔にタオルをかけた上に帽子を被ると蚊除けになる。

全国一のすだちの産地、神山町のすだち採り開始！すだちの木の間に入って奮闘する。今年は温暖だったので、すだちが異常に大きいとのこと。すだちにはこの地の高度が最適で、ちょうどよい酸っぱさを持つので昔からすだちの産地として知られている。

<u>日本一のすだちの産地 神山町</u>

スダチはユズの近縁雑種または偶発実生と推察される徳島特産の香酸かんきつ。学名は「Citrus Sudachi Hort.ex Shirai」。古くから徳島県下の庭先果樹として植えられて利用されてきた。

徳島県には鳴門市大麻比古神社を中心とするスダチ伝説がある。その伝承は 1793 年に大麻神社の神主永井日向により書かれた神社事由旧跡産物申上帳(寛政５年)にみられる。神社の裏山にスダチの原木があり、「大麻はんが見えなければスダチは育たない」との古諺があり、これを中心として大麻山一帯のみスダチは分布・栽培されていると信じられていた。この理由については定かではないが、黒上泰治氏はスダチの消費地が大麻山の視界の範囲にある地域を主として限られており、スダチの営利的生産の限界が主としてそられの地域に含まれることを示唆したものとも受け取れる、としている。今日の時点においてスダチの原木は県内で発見されておらず、大麻山の見えない地域において経済栽培が行われいるのを見ると、大麻山伝説は根拠のないものと考えられている。

■スダチがいつ頃から栽培されてきたかということについては、多くの資料がある。古くは宝永６年(1709)の故事にスダチが説明されているが、起源・来歴については明らかでない。スダチに古木は県内一円に散在しており、S41 にスダチ古木調査が行われた当時には、阿南市にて約 350 年、神山町で 300 年、徳島市や鳴門市に 150～200 年の古木があることが報告された。神山の古木については H8 に枯死している。

スダチは耐寒性が強く、最も耐寒性の強いグループにランクされている。平均気温 14゜C 以上、冬季最低気温が－５゜C 以下にならない所が適地である。スダチの主要生産地は、神山町，佐那河内村，上勝町，木沢村等。

スダチは酸味が強く、すっぱい。成分としては果皮に含まれる香気成分、果汁に含まれる糖、酸、ビタミン C などがある。

・ **香りの秘密**

スダチの香りは果皮に多くが含まれていて、成分はテルペン系炭化水素が主である。

その中で α－リモネンが最も多く、ついで β－テルピネン、ρ－シメン、α－ピネンなど多く含まれる。

スダチ固有の成分として果皮から２種のフラボンが発見され、スダチチン、デメトキシスダチチンと命名されている。

・ **栄養価値と機能性**

甘みの元となる糖含量は非常に少ない。しかし酸含量は高く、８月下旬～９月上旬に最も高くなる。

酸の種類では、クエン酸が主で、リンゴ酸が次ぎ。その他にピルビン酸、コハク酸、フマール酸などがごく微量含まれる。

ビタミンＣは９月上旬で 40mg%程度含まれている。

スダチには独自の香り、緑色の果実、ビタミンＣとクエン酸を豊富に含んでいる。

クエン酸には、利尿作用，浄血作用などがあり、さわやかな酸味が食欲の増進をそそる。

ビタミンＣは、老化防止、抗壊免疫作用などがある。

また、ビタミンＡ効力(プロビタミンＡ)を表すカロチノイドが多く含まれている。

さらにはスダチ果汁中にはペクチンがわずかに含まれている。ペクチンにはカリウムを体内にとどめてナトリウムを排除する効果がある。

「駅の道　温泉の里　神山」は地元の交流地点

みな黙々と蚊に刺されながら、すだち取りに勤しんだ。30 分も採ると持ちきれなくなった袋を引きずってテントの下に集まって町で用意いただいた可愛い小箱に箱詰め作業。両手にすだちを抱え、三々五々公園を降りはじめる。ホテル前で集合写真撮影。地元の「道の駅　神山へ」こちらは、さくら野舞台でお世話になった小川さんが事務局長を務める地元の交流地点、村の持ち寄りバザール。採り立ての農産品を置いて、他の商品を買って帰る。勿論産地直送なのだから、新鮮で安い。樹齢 200 年から採れたすだちや、生花に木工品、食材を加工したお漬物や手作り食材などが日替わりの旬の食材が並ぶ。

ここでは昼食場所のキャンプハウス、コットンフィールドが地元の食材をふんだんに盛り込んだジェーラードが美味。すだちと鳴門金時ジェーラードをダブルで味わう。作庭家の古川さんは目ざとくお茶席用の良質の炭を見つけ、次に焼きあがったらまとめて送ってほしいと商談成立。昼食の秋刀魚やアマゴを焼いた炭も地元産、もともと林業で栄えた地域なので炭焼き小屋も稼働中。自給自足の村の暮らしの一端をみる思いがした。

わたしは、道の駅で、すだちを買い足し、木工の産地なので、1500 円の杉の風呂桶を買い込み、自宅のお風呂ですだちの輪切りを浮かべ、杉の風呂桶で温泉気分を楽しんでいる。この地域は、胡蝶蘭などの蘭の栽培農家も多く、市価と比べるとびっくりするほど格安の掘り出しものがある。すだちシーズンでは、宅急便も“すだち入り”だと 200 円引きと旬を運ぶお手伝い。更に買い足して他の掘り出し物と共に詰め込む。ここ「駅の道　温泉の里　神山」では、確認すれば神山町の掘り出し物についてアドバイスもしてもらえる。

道の駅・温泉の里神山　℡０８８６－６３６－７０７７

すだちに秋刀魚・アマゴに郷土料理を満喫

そして、バスで戻り山道を歩いてコットンフィールドへ。清流の傍にコッティジが点在している。コッティジではすでに岩丸さんら地元の主婦が私たちのために、炊き出しをしていただいていた。ベランダの釜に炭がいこると、大きな網の上に先ず秋刀魚が並ぶ。すだちの産地神山町と岩手の宮古魚協がタイアップして秋刀魚とすだちをセットで売り出している。今回も、そのルートで岩手の港で陸揚げされた秋刀魚を神山町へ直送。新鮮な秋刀魚が輝いている。シェフは、井上章さんと、深堀さん。井上さんは豪快に、深堀さんは焼き具合を確認しながらこんがりと焼き上げる、

テーブルにはすだち酢で味付けした山芋や豆やコンニャク入りのまぜ寿司に、ぼうぜ姿寿司に岩豆腐。具沢山の蕎麦飯汁。冷凍していた黒空豆の餡をつかったおはぎが食卓に並ぶ。そして、生きたまま竹串にさした大きなアマゴ、その匂いをかいで三毛猫がやってきた。村では野良猫の素性も知れ渡っていて、これはおばあちゃん猫で、どこそこの子のお母さんで、孫がいるのよと見分けがつく程に、この村に住む猫にも村人同様に系図があるらしい。気がついたら、そのおばあちゃん猫はおこぼれの秋刀魚やらアマゴやらをたらふく食べて満腹状態。食卓を囲む私たち同様に、満足そうに目を細めている。

私もその三毛猫同様に井上さんの傍に陣取り、炭火で焼きたての秋刀魚尾をたいらげた後、30 センチ程の大きなアマゴを串刺しのまま豪快に齧り付く。このあたりの川は初夏には蛍も飛び交うほどの清流を泳ぎまわっている新鮮なアマゴに川魚の生臭さなどなく、程よい塩加減に、すだちがそれぞれの食材をさらに盛り立てる。強烈に自分を主張しないが、食材を押し出す縁の下の力持ちとして、すだちは最高のﾊﾟｰﾄﾅｰだと痛感。

　食べきれないバラ寿司やおはぎや焼き魚はお持ち帰りとなる、一泊五食付ツアーとなる。

後片付けを手伝い、満腹猫ちゃんと記念写真。

ご苦労さまでした。お母さんたちの手作り郷土料理のおもてなしなんて今時はとっても贅沢。お遍路さんを迎えるように、大阪から辿り着いたメンバーに施していただいた。

卯建の町　脇町散策・縁から縁の徳島ツアー

バスはまたホテル前に駐車。神山町を離れて、後は一路山道を慎重にバスは走行。山越え峠越えで、脇町を目指す。道中、食べ疲れたメンバーはお昼寝タイム。

　1 時間半ほどで、最終目的地　卯建の町脇町に到着。卯建とは隣家との防火壁のことで、卯建を今作っても 2 百万円也と、多額の費用がかかるので、羽振りがいいことを「卯建をあげる」といわれようになった。やはり余裕がなければ卯建はあがらがらない。

脇町は、「四国三郎」の異名をもつ吉野川の辺にあり、かつて毎年台風シーズンには大きな被害を与えたが、同時に肥沃な土壌もこの地域にもたらし、台風前に収穫できる藍草の一大産地となった。更に、吉野川が春から夏に風が川上に向かって吹くため徳島方面から米や塩、魚肥、海産物を運び上げ、下りの船には藍や煙草、炭、薪を運ぶ中継地点と脇町が栄え、大正 3 年に鉄道が開通すると平田舟といわれる川舟は姿を消し、脇町に卯建の町並みが残った。そして昭和 63 年に全国で 28 箇所目の重要伝統的建造物郡保存地区に選定された。

バスを降りて船着場あたりからまず通りに出て記念写真を撮った後 1 時間自由行動となったが、町指定文化財の吉田家住宅を蔵も入れてゆっくりみてまわって 30 分。後は、山田洋二監督の映画「虹を持つ男」の舞台になったオデオン座に走る者、お土産屋さんに飛び込む者、1 時間では散策しきれない程の見所沢山の町並みが続く。

バスに戻った一行は、後は一路大阪へ、途中、明石海峡大橋のライティングを楽しみながら神戸を経て、大阪駅、難波駅、天王寺駅で解散。2 時間程のﾄﾞﾗｲﾌﾞを楽しんだ。

今回の旅で、農村舞台や阿波の人形浄瑠璃を発見！！魚の王様真鯛に、旬の魚、秋刀魚に、清流の女王アマゴに、郷土料理満載のグルメ。更にすだち採りに興じ、改めて、村の方々の温かい歓待に忘れかけていた「おもてなしの心」を回顧。

それぞれに新しい発見があった。

　尚、この旅で、四天王寺での観桜会以来参加いただいていた西野ご夫妻と、文楽のﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞの掲示板の書き込み後、30 分で参加しますと応募いただいた木田さんは 10 月から、入塾いただき、東口さんは塾生復帰。縁は縁で続きます。

そう、この企画の発端は、友人の岩丸さんが嫁がれたという縁結びです。友達の友達は皆友達だとお迎えいただきました徳島の皆さまに感謝すると共に、阿波の農村舞台に人形浄瑠璃などの伝統を保持される姿、鳴門の真鯛やアマゴ・友好食材の岩手宮古の秋刀魚に、日本一の生

産量を誇るすだちなど徳島の食材の恩恵に感激したとても意義深い徳島ツアーでした。（原田彰子記）

《参加者》塾生：秋山建人・井上章・大森史子・北原祥三・木下奈美子・杉山英三・原季美子・原田彰子・深堀正晶・森川千世子・山本ゆき・一般：向内美枝子・木田信生子・西野晃・西野順子早矢仕千春・東口恵子・古川三盛